統一宗教神学の定立のための研究

A Study towards the Establishment of Unification Theology of Religions

清心神学大学院大学校
ファン・ジンス

I. はじめに
II. 宗教が宗教を眺める三つの方式：排他主義、包括主義、多元主義
　1. 排他主義（Exclusivism）
　2. 包括主義（Inclusivism）
　3. 多元主義（Pluralism）
III. 統一宗教神学
IV. 統一宗教神学の復帰摂理的観点から見た既存の宗教神学
V. おわりに

はじめに

科学の発達によって引き起こされた世俗化が急速に進行した20世紀をたどりながら現代人たちは深刻な意味の不在と取り組んでいる。究極的な人生の意味という問いは古くさい宗教的イメージとかみ合わさって、暗黙的にダブー視されるそのような質問になってしまってから既に長い。人々は忙しい日常の中に自身を陥没させながら、短期的で実用的な諸目的を前に置いて絶えず自身を鞭打ちながら生きていく。人生の目的なり、人生の願いについて――少なくとも表面に見える姿を見た時――それ以上尋ねることも、気にすることもない。

そうであれば、現代人たちは真に究極的な人生の意味に対する問いを不必要に思うであろうか？フランスの哲学者ルク・フェリー（Luc Ferry）はそうではないと見る。相変らず現代人たちは人生の意味を渇望し、彼らの典型的な不安な情緒はその意味に対する根本的な答えを探すことができないためである、というのだ。近代以前まではその役割を宗教が担当してきたが、世俗化が席を占めた今日においては、宗教に対する不信により、その役割を心理学や精神科での相談が代ろうとする試みがなされてきた、とフェリーは言う。もちろん心理学や精神科医師たちがその根源的解答を与えるはずがない。彼らの論理もまた本質よりは極めて現象的な内容を扱っているからである。今日、相変らず宗教の影響力が減らず、むしろ繁盛する現状の理由をここに探すこともできるだろう。不満足な部分があっても各宗教は各々人生の意味に対する究極的な道を提示してきたためだ。したがって 21 世紀においても宗教の役割は相変らず有効である。

それにもかかわらず、現代人たちの宗教に対する見解は不信でぎっしり埋まっている。いろいろ理由はあるだろうが、何よりも宗教と宗教、そして一つの宗教内でも異なる見解を持つ諸分派が和合することができず、あまりにも長い間争いを繰り返してきたのが主な原因である。各宗教

的世界観が標榜する究極的な道が互いに違って見えるために、その中から出て来る誤解と敵対感などが政治経済問題とかみ合わさって、世界歴史の全般を大小の戦争でちりばめてきたことを私たちはよく知っている。現在でも相変らず宗教戦争は継続しており、世界の至る所で際限なく広がる宗教紛争を私たちは色々な媒体を通じてリアルタイムで接している。これと共に究極的な道の提示という宗教の必要性と共に、その究極的な教えの間の衝突にともなう副作用をどのように相殺して行くかが、21世紀を生きる人類、特に宗教人たちにとって重要な問題である。

一つの宗教は他の宗教をどのように見るべきか？この質問に対して20世紀中盤からキリスト教を中心に「宗教神学」あるいは「宗教哲学」の枠の中で、より体系的な説明が発展してきた。最も代表的な類型としてアラン・レース（Alan Race）が主張した排他主義（exclusivism）、包括主義（inclusivism）、多元主義（pluralism）がある。この類型は多くの学者によって修正補完されてきたが、その基本的枠は相変らず有効である。この論文はこの三つのアプローチについての紹介とともに、それぞれの限界を糾明して、その限界を克服するための方案として、統一思想的観点から眺めた解釈を提示しようとするものである。

これは排他主義、包括主義、多元主義のアプローチの必然的台頭とその使命を明確にすることによって、特殊性と普遍性の関係を通渉的に理解しようとすることにその目的がある。このような脈絡で本論文は、先ず、1）排他主義、包括主義、多元主義の意味とその限界を扱い、2）統一思想を基盤として、宗教間の共通基盤、差異、出会いの目的を糾明することによって「統一宗教神学」の枠組みを定立した後、最後に、3）復帰摂理的観点から、排他主義、包括主義、多元主義が現われざるを得ない必然性を説明して、未来の宗教神学的展望を統一思想の「心情」概念を中心に提示しようと思う。

宗教が宗教を眺める三つの方式：排他主義、包括主義、多元主義

排他主義（Exclusivism）

排他主義は長い歴史期間においてキリスト教が異なる宗教を眺める典型的な方式として、イエスが伝播した福音の道だけが真の道であり、他のいかなる宗教が説く道も神様とは関係ない、人間が作り出した偶像と同じものだと主張する。したがって、排他主義的立場では他のすべての宗教の教えは究極的に福音の教えによって必ず代替されなければならない。このような観点は、一つの道が絶対的真理とするならば、他の道は必然的に非真理になるしかない「真理」の本質についての自然な理解方式と相通じるものであるから、唯一神の宗教が他の宗教を眺める最も基本的な態度として、長い間その位置を占めてきた。

このような排他主義はキリスト教の中だけに神様のみ言葉と救いが存在するという信仰を基盤として、歴史の終わりにはただ一つの宗教、すなわちキリスト教だけが残るようになるという結論になる。神様の愛は「普遍」的にこの世界全般に存在するが、その愛の実現はただイエスを通してのみ可能なので、神様と人間の完全な関係はイエスを中心とした「特殊」な共同体、すなわち

キリスト教においてのみ成されるというのである。

カール・バルト（Karl Barth）はこのような排他的キリスト教の伝統を神学的に確立させたと評価されている。彼は 20 世紀始めの近代化の風に乗って登場した自由主義神学の人文学的聖書解釈方式と科学的、批評的知識獲得を通した人間の「進歩」を強調する「神の国」の世界観に「ノー」と叫び、全てのものは人間の努力如何にかかっているのではなく、ただ神のみ言葉にかかっていると主張する。したがって人間は後に退いて、神様を信頼し、神様がイエスを通して自ら現れることにすべての優先権を置かなければならないというのである。

初期のバルトは他の宗教に対して多少苛酷な見解を堅持したのであるが、それによれば、他の諸宗教は全て神が人間にしてくれることを「期待」する人間的な努力のみである。超越的権能によって神が自ら現れることを強調する彼の見解では、神はただイエスを通して自身を現わすので、他の宗教では神の音声が鳴り響かない。結局他の宗教を信じる人々は多くの長所にもかかわらず、人間的な無駄な期待に満ちた偶像崇拝者に転落してしまう。後期になるほど彼は他宗教に対する鋭い批判を緩和し、他宗教にも神のみ言葉の存在の可能性を残したが、イエスを中心とした排他的神学の姿はそのまま維持した。

ハン・インチョルは宗教間の対話において次のような三つの核心要素が存在すると言う。第一は宗教間の共通基盤の存在有無とその性格であり、第二は宗教間の差異が何かに関することであり、最後は宗教と宗教の出会いの意味に関することである。この三つの要素を中心に排他主義を覗いて見る時、先ず宗教間の共通基盤の存在有無について、排他主義はキリスト教と他宗教間には神のみ言葉の存在有無に関する確実な区分があるだけで、いかなる共通基盤も存在できないと見る。さらにキリスト教と他宗教間の差異というものは単純な「程度」の差ではない質的に顕著な「種類」の差異を意味するもので、人間の努力ではその差異を克服することはできない。最後に排他主義において宗教間の出会いというものは極めて個人的な改宗にその目的がある。バルト式の排他主義は他宗教との出会いに対して非常に消極的な姿勢を持つのであるが、個人的改宗の目的を除いては対話の他の目的を探せないためである。「異なる」道を行っている人々との対話において相互変革や成長を期待することは難しい。排他主義が主張する真の道と偽りの道の間に第三の道というものはないので、宗教間の対話は結局福音を伝えることができる機会になるだけであり,参加者らは二者択一の岐路に立ったまま改宗の選択だけを強要されることになる。

包括主義（Inclusivism）

包括主義は 20 世紀半ばのカトリック第２次バチカン公会議において、他宗教の中にも救いの可能性があるという革命的な内容が発表され、その思想的特徴がカトリック神学者たち、特にカール・ラーナー（Karl Rahner）によって具体化された。ただ一つの真理だけがイエス・キリストの中に存在するという信仰は排他主義に似ているが、包括主義は排他主義とは異なり、その真理がキリスト教に限定されて存在するのではなく、神がこの世界のどこにも臨在されるように、すべての

宗教に内在しており、またイエスの救いの恩赦が全人類の為のものであったように、神の救いのみ心はすべての人間に向いていると見る。超越的な神に向かう「先験的な志向（original orientation）」はすべての人間に内在している、と見ることによって、他宗教の中に神の啓示と救いの可能性を開けておく点で包括主義は排他主義とは大きな差異点を見せる。

真理は一つであり、その真理はイエスを通してキリスト教の中に最も「明示化され、概念化され、主題化」されて「反映（reflection）」しているのであるが、他の宗教においても異なる「程度」に反映しているという差異があるだけで、真理を共に共有している。一つの真理に対する具体的な知識を得ることが救いの必須条件ではなく、各宗教の伝統に忠実でありながら、神から付与されたその真理の基準に合致するように生きるならば、結局神のみ心のままに生きたことであるので、救いの恩赦が可能だというのである。このような論理はラーナーの「匿名のクリスチャン（anonymous Christian）」の理論によって確かに発展した。イエスによって明確にあらわれた福音の真理に接することができる機会をたとえ得られないとしても、内在した「指向性」に従って生きていくすべての人間は匿名のクリスチャンとして神に向かって進むことができる可能性を実践することができる。

このような包括主義は、プロテスタント神学と区別されるカトリック神学の「存在類比（analogy of being）の概念からその根拠を探すことができる。存在類比とは人間という存在はすでに神の存在の中に「前提（presuppose）」されているために、神に似た存在としての価値をすべての人間が持っているというのである。前提された人間であるので、神が人間と関係を結ぶということは結局無限なる神が有限性まで自身の中に抱く内在的自己の関係の形成を示す。人間の存在構造自体が神との関係の可能性を抱いているとするカトリック神学の存在類比は、ラーナーの人間存在に内在する「先験的な指向」の思想を裏付けており、包括主義を支持する根本的論理を提供している。

包括主義は排他主義より他宗教との関係の門を広げた神学的概念であるが、相変らず排他主義の限界から抜け出せなかった部分が存在する。宗教と宗教の間の共通基盤を神の普遍的な救いの意志と人間の存在構造に内在する超越神に向かう「先験的な指向性」として見たのであるが、共通基盤がこのようなものだということはカトリック神学の主張であるだけに、その概念が異なる宗教の教えに還元させることはできないという逆説を発見するようになる。例えば、仏教における超越神に対する概念は、キリスト教のそれとは全く違う次元のものとして、比較自体が不可能であるのみならず、すべての執着を捨てなければならないとする仏教の構図の道は、キリスト教の包括主義が主張する超越神への旅程とは両立できない。言い換えれば、カトリックが標榜する包括主義は、カトリックの神学的内容、特に三位一体の教理に基盤を置いた内容を共通基盤として立て、それを他の宗教に適用させる「一方的」な性格を持っている。これは結局、排他主義の路線と大きく異ならない。また他宗教との出会いの目的を包括主義的観点から調べれば、「匿名の信仰」をイエスを中心にした「明示的な信仰」に脱皮させることであるので、これは排他主義的改宗の努力と現象的に大きく異なるところがないように見える。包括主義は結局キリスト教が異なる宗教を眺める方式において前より開かれた神学的観点を堅持するという意味を持ってい

るけれども、宗教全体に共に適用させることができる普遍的理論としての正当性を得ることは困難だと言える。

多元主義（Pluralism）

多元主義を一言で定義することは容易ではない。あまりにも多様な理論が混在し、「家族類似性(family resemblance)」で縛られているためだ。事実、一つの共通した(権威的な)真理の道を拒否する多元主義の性格上、一つの正義のみを持つというのも適切ではないだろう。それにもかかわらず、主な共通点についてみようとすれば、一つの真理主張(truth-claim)が他の真理主張を置き換えたり包括できないという点だ。すなわち、色々な真理主張は互いに両立することができず、したがって真と偽に区分することができない。

なぜならそれぞれの真理主張は各自の固有な文脈の中ではすべて真であるためである。多くの多元主義の理論を限定された紙面ですべて扱うことはできないので、代表的な二人の思想家を中心に説明しようと思う。一人はジョン・ ヒック（John Hick）であり、もう一人はジョージ・リンドベック（George Lindbeck）である。彼らは多元主義を代表する人物と見なされるが、互いに接近方式が明確に違うので、多元主義の中の多元性をよく見せくれる。

先ず、ジョン・ヒックの思想を調べれば、排他主義や包括主義から完全に抜け出すことが出来ない制限された多元主義の様相を発見することができる。彼は多様な宗教が標榜する究極的「実在（the Real）」は同一だと見たのであるが、人間が本来持っている認識能力の制限性と文化的、歴史的、言語的特殊性などにより、その究極的実在が（人格的あるいは非人格神を含めて、）各宗教の伝統ごとに違うように表現されてきたと主張する。究極的実在はいつも人間の経験と認識を超越するので、どんな宗教もその実在を完ぺきに表わすことはできない。すべての宗教は究極的実在を指向するという点では同一だが、それぞれの真理主張は固有なものであり、お互いの主張が還元可能でもない。これはカントの物自体（noumenon）と現象（phenomenon）を区分する論理を借用したものとして、各宗教の真理主張が両立することができないことを確かにしたという点で宗教多元主義の代表的論理の一つと見なされてきた。

このようなヒックの宗教神学は多元主義の先駆者的位置を獲得したが、キリスト教中心の帝国主義的一方性を内包しているという批判を受けた。究極的実在というものは結局キリスト教的な神を示す表現と解釈することができ、すべての宗教が究極的実在を指向するという主張はキリスト教摂理史観から出たものとして、他宗教（例えば仏教）が受け入れるのが難しい主張であるためである。結局、究極的実在のような普遍的な共通基盤が存在するという信仰がどこからきたかが問題になる。そのような信仰がすべての宗教に共通に存在するのではなく、ある特定の宗教から由来したのであれば、排他主義や包括主義と大きな差異がないという批判を避けるのは難しい。

リンドベックはヒックの究極的実在のような共通基盤の存在を完全に否定することによって、も

う少しポスト・モダン的な指向を忠実に備えた多元主義の論理を提供する。それによれば、それぞれの宗教伝統は各自の固有の文化的文脈を持っており、長い時間をかけて形成されたその文化的文脈に溶けている宗教言語が宗教構成員たちの経験の枠組みを提供する。このような文化・言語的（cultural-linguistic）接近方式によれば、いかなる普遍的共通基盤が存在して、各宗教がそれを文化的に違うように表現するのではなく、各宗教において固有に発達してきた文化・言語自体が宗教人たちの経験を規定するために、たとえば、「愛」のように普遍的と見なされる単語もそれぞれの宗教では両立できない固有な意味を持つのである。したがって各宗教が唱道する真理主張はその宗教の独特の文化・言語に規定された宗教的経験の産物であるために、真と偽を論じることは何の意味もない。リンドベックによれば、宗教間の出会いはこのような各宗教の固有の文化-言語的垣根を間に置いて成り立つというのである。

リンドベックの主張は、一方では各宗教伝統の固有性を認め、尊重できる論理を提供すると見ることができるが、また一方では宗教間のどのような共通基盤も否定することによって、他の宗教を全面的に理解することの不可能さを暗示している。他宗教の文化的言語を習得できる道はただその宗教の中に生まれ育つことに他ならないから、結局自身の宗教でない他のすべての宗教は永遠に理解できない存在、すなわち永遠の他者として残ることになる。リンドベックは多元主義社会で各宗教伝統の固有性を守護しようとしたが、結果的には宗教と宗教の間に渡ることのできない文化-言語的な垣根を立てることによって、地域主義あるいは部族主義（tribalism）と見なされ得る分離された世界観を提示したのである。

統一宗教神学

統一宗教神学が他宗教を眺める方式は「原理講論」に簡略だが明確に現れている。

> もちろん、真理は唯一であり、永遠不変にして、絶対的なものである。しかし、聖書は真理それ自体ではなく、真理を教示してくれる一つの教科書として、時代の流れとともに、漸次高められてきた心霊と知能の程度に応じて、各時代の人々に与えられたものであるために、その真理を教示する範囲とか、それを表現する程度や方法においては、時代によって変わらざるを得ないのである。.....
> 人間がその本心の指向性によって神を求め、善の目的を成就するために必要な一つの手段として生まれてきたのが宗教であるとするならば、あらゆる宗教の目的は、同一のものでなければならない。しかし、それぞれの宗教の使命分野は、民族により、あるいは時代によってそれぞれ異なるものであり、それに伴って、上述のごとき理由から、その経典も各々異なるものとなってしまったので、各種各様の宗教が生まれるようになったのである。すなわち、経典というものは、真理の光を照らし出すともしびのようになものであり、周囲を照らすというその使命は同一であっても、それ以上に明るいともしびが現れたときには、それを機として、古いともしびの使命は終わるのである。

ここに統一宗教神学が眺める宗教間の共通基盤は何であるかが明確に示されている。「人間

がその本心の指向性によって、神を探して善の目的を成し遂げるのに必要な方便として出てくるようになったのが宗教であるために、すべての宗教の目的は同一なことである。」という表現から知ることが出来るように、宗教間の共通基盤は「唯一、永遠、不変、絶対的な」真理の根源たる（1）神様と神様の（2）善の目的あるいは創造目的、そしてすべての人間が共通に持っている創造目的を追求する（3）本心である。
このような共通基盤を共有する諸宗教は神様を探して創造目的を成し遂げるために、歴史の中で時代的環境に適合した真理の灯を明らかにしたという点で皆同じ使命を持っていると言うことができる。

統一思想によれば、最初の共通基盤としての神は万有の本体あるいは原相である。本体とは存在それ自体の起源になる神の愛とその愛の力が具現される関係性の原型構造および属性をいう。すべての人間と万物はこのような神、すなわち本体に似て創造されたので、人間と人間、人間と自然の関係もまた本体構造の内在的関係にその根本を置いている。第二に、共通基盤は神の創造目的である。創造目的もこの本体の属性を糾明しなくては分からないのである。統一思想は神を先ず最初に心情の神として説明する。心情とは「限りなく愛したい情的な衝動」であり、この心情が動機になって創造が成ったので、神の創造目的もまた神と人間との心情関係の完成を通した喜びの実現にある。統一思想によれば、この創造目的はすべての人間の心情に刻印されている。人間は神の創造目的を中心とした心情に似せて創造されたためである。それ故、第三に、創造目的を追求しようとする人間の心情が共通基盤になるのである。このように統一宗教神学が提示する三つの共通基盤はすべて不可分の関係で絡み合っている。人間の本心とは霊人体と肉身の心、すなわち生心と肉心が主体と対象として良く授け良く受ける状態の心のことをいうのであり、その本心の核を成すのがまさに心情である。したがって時代的環境により異なって発展してきた諸宗教の歴史全体を、神を探して創造目的を成す一つの過程に導くことができた核心要素が、まさにすべての人間に内在している心情的本心なのである。

このような共通基盤に関する内容を知らずしては、「なぜ存在するのか?」に対する根本的解答および存在者間の関係の意味を理解できないために、人類が歴史の中で当面してきた困難を根本的に克服することはできない。したがって原理講論は、「時代の流れに従って」「真理を教えてくれる範囲やそれを表現する程度と方法」を異にしながら、多様な諸宗教が真理の先生の役割を担当してきたのだと言う。統一思想はこのような点を「価値論」で次のように説明する。

> 地球上の数多くの宗教、文化、思想、民族は、それぞれ価値観が異なっているのが普通であるとしても、それらを生じせしめた根源者は一つしかないとすれば、そこには根源者に由来する共通性が必ずあるはずである。
> 今日まで数多くの宗教が現われたが、決して、それぞれの教祖たちが自分勝手に宗教をつくりあげたのではなかった。神は最終的に全人類を救うために、一定の時代に、一定の地域に、一定の教祖を立てて、まずもって、その時代、その地域の人々を善なる方向へ導こうとされたのである。すなわち神は時や場所によって、言語、習慣、環境の異なる人々に対して、その時代、その地域に適した宗教を立てて救いの摂理を展開されたのである。

このような脈絡で見た時、宗教間の差異に対する統一宗教神学の見解も明確にあらわれる。諸宗教は各々発達してきた地域の環境的、文化的特性に合わせて、その時代、その地域の人々が受け入れることができる形態で真理を教えてきたために、結局宗教間の差異の核心は歴史的文脈による真理の異なる表現方式であるということができる。また「心霊と知能の程度」により、その真理が違うように表現されてきたので、包括主義が主張する真理を明確に認識する「程度」の差異もあると言えよう。

ここで重要なことは、先に言及したように、心霊と知能の程度により歴史的文脈の多様性を反映しながら真理を表わしてきた宗教の歴史は、単に分裂した部分を年代順に羅列されるものではなく、一つの流れにつながっているという点だ。原理講論はこれを人間始祖の堕落によって成就しなかった創造目的の理想を復帰しようとする「復帰摂理歴史」と説明する。これは包括主義者たちが宗教間の共通基盤の中の一つとして神の普遍的な救いのみ旨を指摘するのと似ているが、原理講論は神の救いのみ旨が普遍的であるのみならず、「絶対的」であると説明する。「相対的」な人間の責任成就如何により復帰の期間やその範囲は変化し得るが、創造目的を完成しようとする神のみ旨は絶対的なので、人類の歴史全体の中、特に宗教の歴史の中で神の「み旨」が生きて呼吸しなかった瞬間はなかったというのである。そのみ旨が創造目的を追求しようとする人間の心情、本心と相応することによって、神と人間の持続的な関係が維持された中で復帰摂理歴史が流れてくることができた。このような共通した創造目的完遂の目的性を復帰摂理歴史の路程で共有しているために、はじめて宗教間の差異が意味を持つことができるようになる。普遍的で絶対的な共通基盤がなければ、お互いの違いはただ違いで留まるだけで、それ以上にもその以下にもなることはできないのである。

統一宗教神学が内包する宗教間の出会いの目的を調べて見れば、次のようである。第一に、時代を異にして出てきた真理の「教科書」たる各宗教の経典を深く研究する中で、一つの真理についての理解の幅を深くしてその外縁を広めていくことになるだろう。第二に、より実践的に神の創造目的を中心として、崩れた神と人間、人間と人間、人間と自然の関係を回復するための実質的な努力を宗教人たちが共に額を合わせて悩んで実践することである。狭い意味の教会や教理による改宗よりはすべての宗教人たちが関係性の回復の核心たる真の家庭の理想を実現して行けるように、お互いを励ましてそのような真の家庭の文化に導くことができる精神的指導者の役割として位置を占めなければならないのである。

このように統一教の教理、思想体系の中で宗教間の共通基盤、差異、出会いの目的を整理してみた時、統一教宗教神学の方向性は包括主義的な性格をたくさん持っていることを発見することができる。神の本体に基盤を置いた一つの真理が時代的/地域的特性と共に、心霊と知能の程度にしたがって、真理の教育内容と方法を異にしてきたという説明は、その頂点に立っている本体の実体として来られた真の父母に侍っている統一教の真理教育があたかも「より明るい灯が出てくる時は、それにより古い灯の使命は終わる」ように、最も明るい灯の使命の責任を持ち、それ以前のすべての宗教的教えを「完成」しているのだ。またラーナーのいう神の普遍的救いの

み旨と超越神に向かう人間の先験的指向性が互いに関係を結んでいるように、統一思想も創造の目的性を持つ神の心情に似て創造された人間の「四位基台」の存在構造の核心に創造目的を中心とした心情が刻印されており、人間の生の根源的方向性を設定する、と説明する。

一つ強調する点は統一宗教神学は多元主義的「要素」を持つように見えるが、多元主義の範疇に入りはしないという点である。各宗教の中心が名前は異なるが一つの神、一つの真理の顕現という点でジョン・ヒックと同じ神中心的多元主義を思い出させることもできるだろうが、先に言及したように、ヒックの実在（the Real）中心的多元主義は認識論的に語れないカント式の壁を置くことによってその実在に向かった他の接近方式が互いに両立できない独立性を維持することができるようになった制限的多元主義と見ることができる。しかし、統一教の神は理解できない領域に閉じ込められた神ではなく、創造物の共通した性格を通して知ることが出来る神、したがって愛することができる神である。このような愛の本体でおられる神を教えてくれる宗教は一つの真理が復帰摂理歴史の中で有機的に展開された内容であるために、各宗教の経典を集めて、一つの経典に作っても、その文脈が通じるはずだ。その中には愛の完成を願われる神の一つになった心情が永遠に流れて宗教と宗教は互いに両立可能で、互いに通じることができるということが統一宗教神学の核心ということができよう。したがって差異を強調する多元主義とも距離が遠いということが確実になった。言語−文化的境界線をひいて独立性および特殊性を強調するのは統一宗教神学の観点から見た時、人間が自ら作った世界観に自らを束縛させるが故に、神の心情の疎通を防ぐ行為としか見ることができないのである。

統一宗教神学の復帰摂理的観点から見た既存の宗教神学

統一宗教神学がいう復帰摂理についてもう少し詳しく覗いて見れば、既存の宗教神学の接近方式、すなわち排他主義、包括主義、多元主義を通説的に理解できる端緒を発見することができる。原理講論によれば、復帰摂理とは、「堕落した人間をして創造目的を完成させるために、彼らを創造本然の人間に復帰していく神の摂理」を意味する。このような復帰摂理は創造の過程がそうであるように、秩序と法則を持って進行される「再創造」の過程であるから、一定の原理、公式があるはずだ。原理講論のカインとアベルを中心とする「アダム家庭を中心とした復帰摂理」に、その公式についての典型的路程がよく現れている。人類始祖たるアダム家庭において、アダムとエバが創造目的を成就するためには、彼らの成長過程において神の戒めを絶対的に信じて従うことによって、象徴的な「信仰基台」を先ず立て、その基台の上に神と一体となる「実体基台」を立てて、真の家庭の理想を完成しなければならなかった。そうしていたならば、アダムとエバは人類の真の父母になり、全世界的な「神の下の一家族」、すなわちアダム家庭文化圏を形成したはずである。しかし、彼らの堕落の故に、この成長過程は本来の軌道を外れてしまった。彼らは戒めを破ることによって信仰基台を立てることができず、したがって実体基台も立てられないまま、サタンを中心とした世界を形成してしまった。

原理講論によれば、この過程を戻すために復帰摂理は最初に分立の過程を経なければならない。堕落後、神も対することができ、サタンも対することができた中間位置のアダムを、より善

側のアベルとより悪側のカインに分立させて、アベルが象徴的な供え物を通して信仰基台を立てた土台の上で、カインがアベルに「従順屈服」し、アベルはカインを愛で抱くことによって実体基台を立てた後、メシア、すなわち真の父母のための基台を立てることが、原理講論が説明する復帰の公式である。このような復帰の過程は歴史上失敗を繰り返してきたのであるが、この公式自体が変わることはない。カイン型とアベル型の分立と彼らの和合を通して、真の父母につながる復帰の過程は今日まで続いており、人間個々人の次元から世界的次元に至るまで実現されなければならない路程として残っている。

ここで強調しようとする点は、復帰摂理の過程において、カイン型とアベル型の排他的分立の瞬間が必然的だという事実である。分立とは線を明確に引くということだ。これは明らかに排他主義の精神と一脈相通じる。分立しなくては復帰自体が不可能であり、分立された二つの主体は各々善と悪、神側とサタン側を象徴するために、一方が真であるならば他方は偽であらざるを得ない、互いに両立できない平行線を行くようになる。カインの供え物を神が受け取らなかったという事実はこの点を象徴的によく表わしている。したがって復帰摂理歴史上、分立の初期にはアベル型世界観がカイン型世界観を排斥するほかはなく、同じようにカイン型世界観はアベル型世界観を転覆させようとする動きを見せる。原理講論は現代社会において、このような対立が民主主義と共産主義、あるいは有神論と無神論の対立として克明に現れると説明する。

このような復帰摂理に立脚した理解方式が統一宗教神学に含まれているので、排他主義はそれ自体としての価値を論じるより、復帰摂理過程に現れる必然的瞬間として眺める方が、より根本的理解を得ることができるという点である。例えば、中世の統合的神学がその使命を果たせないまま、教会の腐敗を眺めていなければならなかった時、復帰摂理は分立の瞬間を必要とし、その時結局、神主義により近い、すなわちアベル的な宗教改革運動とより世俗的な、すなわちカイン的な人本主義ルネサンス運動が全く異なる方向性を持って分立して現れたのを見ることができる。このように復帰摂理過程において排他性が必要な時がある。しかし注意しなければならない点は、復帰摂理の進捗という、より大きな目的のための過程としてその排他性の必要性を認識してこそ、偏狭で権威的な排他主義の限界を抜け出て、和解と統合へ行く道の要所としての真の意味を生かすことができるということである。

原理講論によれば、分立後にはカインとアベルは互いに和解しなければならない。主体の立場にいるアベルは対象の立場にいるカインを愛で抱くことができなければならず、カインはアベルの主体性を自発的に認めなければならない。これを言い換えれば、アベル型の人生観はカイン型の人生観を包括して、一つの真理船上にある瞬間に昇華させてくれなければならないということだ。これが典型的な包括主義が現れる時点である。カインとアベルが一つになる実体基台を立てるためには、分立のパラダイムでは不可能であり、二つとも復帰摂理過程の必然的瞬間であったという悟りと共に、和解と統合のパラダイムに転換されなければならない。しかし復帰摂理の公式により、必ずカインがアベルに自ら包括されなければならないので、一方的で独善的な包括主義では和解と統合を期待することができない。したがってこれを宗教間の関係に適用してみれば、アベル型の宗教が包括的真理を提示するにあたって、他宗教を自身の真理体系に吸収すべき

存在として卑下してはならない。他の諸宗教が担当してきた復帰摂理歴史の中で大体において不可能だった歴史的伝統を深く尊敬する姿勢でもって和解と統合の文化を生活的な面まで定着させなければならないのである。

そうだとすれば、多元主義は復帰摂理の観点では全く立つ場所がないのであろうか？肯定と否定の答えを同時に下すことができる。結論から言えば、復帰のパラダイムでは不可能であり、復帰が終了した発展のパラダイムでは可能である。統一思想は人類歴史を「発展」のパラダイムと「復帰」のパラダイムに区分する。発展とは、精神と物質、人間と環境、政府と国民、人間と機械など人間生活の多様な分野で主体と対象の間でよく与えよく受ける「授受作用」を通して、科学、経済、文化などが進歩して行くことを意味する。このような発展には終わりがないのである。外的な文明の発展は人類始祖が堕落してもしなくても広がったはずの人類の成長過程である。反面、復帰というのは堕落以前の状態に戻ることを意味するものとして外的発展の概念とは異なる。堕落による悪を根絶して根本的な神主義の価値観を回復することによって、歴史発展の内的な方向性を神側に少しずつ「転換」することを意味する。したがって復帰摂理は終わりのない永遠なるものではない。人類が堕落以前の状態に完全に転換されるならば、「復帰」のパラダイムはそれ以上存続する必要がなくなる。

このような復帰の転換が終わってひたすら発展のパラダイムで繰り広げられる世界の姿は、これ以上善と悪の区分を心配する必要がない、そのどのような多様なことも、神の原理の中でその正当性を見出すことができる驚くべき創造的自由の世界になるだろう。そのような世界の中では一つの創造的観点を異なる観点に置き換えたり、包括する理由は全くない。全人類が神との心情的な一致の中で家庭的、社会的関係を結ぶ心情文化世界では、正しいか否かの問題よりも、どれだけ創造的かに関する問題がもっと重要であるためである。復帰のパラダイムが終息して発展のパラダイムが完全に定着する時、真の意味で多元主義を楽しむことができる時代が開かれるのだ。

その世界について別の表現をすれば、多元主義と「統一主義（unificationism）」を区分できない世界であるということができる。統一思想によれば、神の心情に似た人間の心情は情・知・意の根として、各々美・真・善を追求するようになるのであるが、この美・真・善を追求する活動として現れる芸術、学問、規範の領域が混合した和合と統一の世界がすなわち心情文化世界である。言い換えれば、人間のすべての活動の根、原因、動機に神の心情が生きて呼吸する世界である。このような世界では個々人の明確な個性がすべて神の心情に根を置いた神的な価値を持つので、むやみに他人の個性を当たりはずれの基準として排斥したり、特定の一つの範疇の中に一方的に包括することはできない。そのようにするのはその個性の神的価値を格下げする結果を招来するためである。したがって個別性はそれ自体だけで固有な価値を持ち、異なる個別性と代替することができない唯一無二な性格を持つ。真の多元主義とはこのような個々人の唯一無二性から始まるものである。しかし、心情文化世界は個人の固有性だけを強調する分離された世界を意味するものではない。個人の固有性の最も奥深い指向性（orientation）には、前に言及したように、神の心情、特に創造目的が刻印されているために、至極の多元主義世界は神の心情

を共有する至極の統一主義世界に相対する。多元性と統一性の関係は結局二律背反的なものではない一脈相通じるものなのである。

終わりに

これまで他宗教を眺める代表的な三つの方式、すなわち排他主義、包括主義、多元主義の内容とその限界について説明し、さらに統一原理および統一思想に基づいて、宗教間の共通基盤と差異、そして宗教間の出会いの意味を探ってみることによって、統一宗教神学の性格を糾明し、最後に復帰摂理の観点から排他主義、包括主義、多元主義が現れるしかない必然性を明確にすることによって、分離した三つの見解の通渉的理解を試みた。統一宗教神学の現在の性格は包括主義に近いが、復帰摂理の観点から排他主義を支持する場合が生じ得ることもあり、また復帰のパラダイムが終わる時点で、多元主義を強調する性格を現わすことも有り得る。他宗教を眺める時点が復帰摂理のいかなる文脈から出てきたかを把握することが、第一に重要だと言えよう。

最後に言及したい点は、統一宗教神学の内容全般を一つの特殊な主張に限定して眺めるならば、偏狭な排他主義や包括主義の一つの形態と見なすこともできるという点である。マーク・ハイム（Mark Heim）が、「結局私たちすべては包括主義者だ」と言ったように、論理的にだけ見るならば、真理だと主張するどのような神学的立場も、排他的包括主義の範疇から抜け出すことは難しい。しかし、統一宗教神学で注目すべき点はまさに「心情」の概念である。人間の情・知・意が追求する芸術的、学問（論理）的、規範的領域全般の根底で、絶えず動機を誘発させている心情の存在が意味することは、結局論理的次元で相反した神学的概念が文字的に和解することができる可能性よりは、人間と人間の出会いが情・知・意を合わせる全面的心情的(あるいは霊的)経験に昇華される時、はじめて調和と一致の窓を開くことができるということである。したがって統一宗教神学の有効性は――他のすべての宗教神学も同じように――宗教間にそのような心情経験を導くことができる情・知・意の要素がその神学の中にしみ出て広範囲に実践され得るか否かにかかっている。文字的、論理的限界を明確にする統一宗教神学は、このように排他的包括主義の範疇を認めながらも、その限界を克服できる「心情的」動機を提供しているのである。

参考文献

ニート・ポール,『宗教神学入門』.ユージョンウォン訳、キョンブク:プンド出版社, 2007.
世界経典編纂委員会,『世界経典』. ソウル:国際宗教財団出版局,1994.
世界キリスト教統一神霊協会,『原理講論』ソウル:成和出版社,1995.
統一思想研究院,『統一思想要綱』ソウル: 成和出版社,1993.
フェリー・ルーク,『神−人間、人生の意味』ウ・ジョンギル訳、
ソウル:ヨンリム・カーディナル,1998.
ハン・インチョル,『宗教多元主義の類型』韓国キリスト教研究所,2000.

ファン・ジンスー,「存在の類比、信仰の類比、心情の類比」『統一神学研究』13 (2008):165-197.
ジョン・ヒック,『宗教哲学』キム・ヒス訳　ソウル:トンムンソン,2000.
Balthasar, Hans Urs von. *The Theology of Karl Barth.* Garden City, NY: Anchor Books,1972.
Barth, Karl. *The Humanity of God*. Louisville, KY: WJK Press,1996.
Heim, Mark. *Salvations: Truth and Difference in Religion*. Maryknoll, NY: Orbis Books,1995.
Lindbeck,George A., *The Nature of Doctrine:Religion and Theology in a Postliberal Age.* Philadelphia:The Westminster Press,1984.
Race, Alan. *Christians and Religious Pluralism: Patterns in the Christian Theology of Religions*. Norwich,U.K.:SCM Press,1993.
Rahner, Karl. *Foundations of Christian Faith: An Introduction to the Idea of Christianity.* New York:Crossroad,1989.
Smith, Willfred Cantwell. *Towards a World Theology*: *Faith and the Comparative History of Religion*. Maryknoll, NY: Orbis Books,1990.